

『婦人之友』誌にみる 住まい方と価値観の変遷

増渕 実希¹・荻原 知子²・福井 恒明³

¹ 非会員 三井共同建設コンサルタント株式会社 (〒141-0032 東京都品川区大崎一丁目 11-1 ゲートシティ大崎ウエストタワー15 階)
E-mail: masubuchi-miki@mccnet.co.jp

² 学生会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1)
E-mail: ogiwara@keikan.t.u-tokyo.ac.jp

³ 正会員 法政大学教授 デザイン工学部都市環境デザイン工学科
(〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1)
E-mail: fukui@hosei.ac.jp

近年、都市化や郊外化によって地縁型コミュニティの希薄化が進み、問題となっている。その背後には人々の価値観や関係性の変化、コミュニティの性質の変化が影響していると言われている。日本の住居は、時代の動向や人々の住意識に絶えず影響を受けて変化を遂げてきた。その歴史を振り返ってみると、近隣との関係が生まれるように住宅や街が形成されていた時代があったが、住まい方や住居の在り方が変わったことで、人々の関係性の在り方も変わったのではないかと考えられる。

本研究では、一般雑誌『婦人之友』誌の記事に表れる言説に着目し、専門家がつくる街や住宅の環境について、そこに実際に住む人々が何を思い、何を理想として求めてきたのかを読み取った。近代から現代にかけての対象期間100年を6つの時期に区分し、その特徴及び人々の価値観の変遷を明らかにした。

キーワード: 住宅, 住居, 住まい, 住環境, 婦人雑誌, 価値観, イメージ, 変遷

1. はじめに

(1) 背景：日本の住宅/住まい方と人間の問題

我が国の住宅は、海外を羨み手本としながらも独自の発展を遂げた。技術の向上により生活が便利になる一方で、失ってきたものも少なくなく、西山¹⁾、大岡²⁾、鈴木³⁾らは住宅の標準化や発展、それに伴う課題を示してきた。

a) 西山卯三—標準化した住まい—

近代以降住宅計画の分野を確立させた第一人者であり、日本の住まいの研究を牽引してきた西山が、専門家の立場から住宅の形に与えた影響は大きい。西山が一般庶民を対象とした大量の「住み方調査」から導き出した「食寝分離」論は、1941年に発表されて以来大きな影響力を持ち、庶民住宅の設計は「食寝分離」を反映させた間取りへと変化していった。戦後の1951年に設計された公営住宅規格案において食寝分離論を反映した設計が実現され、「51C型」と名付けられた。調査に基づいて行われたこの設計は急速に社会に広まり、特に若い層のあこ

がれの住まいとして注目を浴びた。

戦時下及び戦後の住宅難と言われていた時代に、マルクシズムに基づく西山の設計は、住居水準の向上のために住宅の「標準型」を明示し、大量生産方式でより多くの人々に住宅の供給を実現した。一方、高度経済成長を経て人々の暮らしやニーズが多様化する中で、この一種の画一的な住まいの在り方は見直しが指摘されるようになる。

b) 大岡敏昭—江戸時代の住まいの特徴—

大岡は、「現代の家は、かつての家にくらべて規模や室数が増え、設備も充実して機能的で便利にはなったが、しかし古くからの大切なものを見失ってしまったように思う」⁴⁾と述べ、現代の住宅の原点ともいえる江戸時代の住まいについて論じた。

江戸時代に生まれた玄関、座敷、茶の間、居間、納戸、湯殿などの新たな空間は、現代の家につながるものとなった。この時代の住まいは、開放的で地域の風土と文化によって養われた多様性があり、人と人とのつながりを大切に考えられた豊かな家であったと言われている。

特に、近代以降の戸建て住宅構成の基となる武家屋敷は、和室の部屋が多く並んでいるがそこに明確な空間の秩序性と連続性があったことが特徴として挙げられる。座敷を中心とした接客空間と、茶の間を中心とした家族空間とで構成され、前者の領域においては下位から上位の空間へと連続的に進む秩序があり、後者の領域には家族が集まる日常的な居場所の居間〈公的空間〉から周囲の各部屋〈私的空間〉へと進む秩序があった。家の内と外の関係においても、“縁は内でもなく、外でもないフアジーな空間”であり、庭との連続性があった。それは近所の人々とたわいのない話をするような場ともなっていた。また、接客空間は門のある道側に面し、家族空間はその反対側に設けるといった共通のつくり方があった。方位よりも道を重視し、道に向けて家を構えるということである。外からやってくる人を大切に迎えるという住思想がうかがえる。

戦後一般化した南面志向（＝道路を北面に持つ住宅が一樣に道路に背を向け南面に庭や接客空間や居間を配置する）や、縁側・濡れ縁や上がり框といった公私の中間領域の消滅は、江戸時代までの住まいと近隣関係の在り方と、正反対の志向にあることが分かる。

c) 鈴木成文—住まいの変化と課題—

鈴木は、現代住宅において「画一化」「閉鎖化」「コミュニティの喪失」が問題であると述べている。

伝統的な日本の住居は居住者自身によって生活空間がつくられていて、住まいの個別性と柔軟性があった。

1930年代より住宅改良運動による近代化が進み、椅子式の生活と家族生活を重視するようになる。その頃一般化した中廊下型住宅は、茶の間の確立と各室の動線的な独立を求めたものであり、以前の手前と奥という秩序は崩したが、機能の柔軟性は残っていた。その後の機能の分化・固定化を行った都市 LDK 型住宅や集合住宅型は、住み手の住みこなす力を奪ったと論じられている。

公営住宅標準設計 51C 型は住様式近代化への強い始動となった。豊富な生活実態調査から計画された間取りは、一般に受け入れられ全国的に普及し、その後の住宅公団に受け継がれ更に広く普及した。しかしその一方で生活機能への対応が重要視され、集まって住むことや日本がこれまで培ってきた住文化への配慮が欠けていた。

高度成長期になると急激な都市の人口集中により若い人々は家を求めるようになる。親元から、そして伝統文化から離れ新生活を営む家庭では、専業主婦の大群が発生した。そのことが住居の閉鎖化に繋がったというのが鈴木の見解である。

住居の画一化や閉鎖化は供給側の量産工法などが要因であると共に、住み手側の価値観や意識も影響しているのである。

(2) 意義・目的

このように、住宅の在り方や住宅政策が時代の動向に影響を受けながら、ある面では進化を、ある面では退化を繰り返してきたのと同時に、人々の住まい方や価値観にも変化があったと考えられる。時代の流れと照らし合わせながら人々の価値観を読み解くことは、近年人口減少・少子高齢化、それに伴う空き家の増加、地縁型コミュニティの喪失等、さまざまな都市的問題を抱えている我が国の今後の住宅計画・都市計画の在り方への一助となるだろう。

そこで本研究では、一般雑誌に表れる言説に着目して、近代以降の人々の住まい方や住宅の形の変化を把握し、それと同時に人々の間に存在した価値観の長期的変遷を明らかにすることを目的とする。

(3) 既往研究

住宅の変化やそれに伴う人々の住意識に関する研究には、以下のように多くの蓄積がある。

①住宅の平面・空間構成の変遷に注目するもの。

②新聞や雑誌等の記述や表現に注目したもの。

1) 専門誌を対象とするもの

2) 一般雑誌を対象とするもの

3) 広告・新聞を対象とするもの

①は、真鍋ら⁴⁾による墨田区内の民家を対象に台所作業場の平面に注目し江戸から明治へと移行するなかでの夫人の居場所の変遷を論じたものや、矢込ら⁵⁾による東京都内全域の公団住宅を対象に集住空間の特徴の変遷と外部空間の構造の変化を明らかにしたもの、②-1)は、岡本ら⁶⁾による『新住宅』を対象に平面型の変遷や傾向を統計的に分析したものや、反町ら⁷⁾による『住宅』を対象に大正～昭和期における水回り空間の配置変化と集約化を見たもの、本間ら⁸⁾による『朗』『モダンリビング』を対象に昭和から平成にかけて三世代同居住宅の平面型の変遷を見たもの、②-2)は、久保⁹⁾ 10) 11) 12) による『婦人之友』を対象に住み方・住居観の変化や食事空間の団欒空間化と南面化、接客空間の分離といった住生活改善の様子を大正期に特化して明らかにした一連の研究群や、吉江ら¹³⁾による『週刊住宅情報』を対象に 1980 年以降の首都圏での住宅・住環境の価値変遷を把握したもの、②-3)は、山本ら¹⁴⁾ が 2002 年以降の東京・大阪・沖縄の 3 都市について、袁ら¹⁵⁾ が 1980 年から 2005 年までの福井・岩手・大分について、それぞれ不動産広告や新聞紙広告における言説や間取りから比較変遷を見たものなどが、それぞれ有用である。

これらの課題として、

・平面や空間構成に着目する研究で見られるような、設

計サイド・住宅供給サイドの技術的発展の観点からの考察に加え、実際に住まう人びとの価値観にどのような影響があったかを考察する必要がある

- ・住宅内だけでなく、近隣関係や周辺環境に対する価値観も把握する必要がある
 - ・対象期間について、住宅の伝統的様式や人々の住まいへの価値観に大きな変化が生じたこととされる大正期から現代までの長いスパンで変遷を観察する必要がある
- といったことが挙げられる。

(4) 方法

そこで本研究では、住民や利用者等、大衆の視点から街および住環境の変遷やその価値観の経年動向を読み取るために、婦人雑誌の言説に着目し、テキスト分析を行う。

2. 調査

(1) 『婦人之友』誌

専門誌・一般雑誌・情報誌などから網羅的に複数の資料を比較検討した上で、『婦人之友』誌を調査対象雑誌とした。同誌は1908年の創刊以来、戦時中も途切れることなく今もお発行され続けている雑誌である。その編集方針は「家庭一切の実務に関して、適切なる考案を世間に紹介」することで、発刊当時は中流階層の主婦を読者対象としており、比較的豊かな経済社会層向けと捉えられるが、そこには人々がよりよい暮らしのために摸索している様子が描かれている。住宅に特化した専門誌や新聞記事からでは見えてこない、市井の人々の住まい方や内側にある価値観を読み取ることができる。また大量に、かつ時系列に沿ってデータの収集が行える点において、重要な資料であると言える。

(2) 記事の抽出

1910年から2009年の100年間1192冊の全記事の中から、衣・食・住・家計のテーマのうち住環境関連に該当する内容を抽出して得られた全1011記事を対象に、記事内容調査を行った。

(3) 記事内容の整理と分類

記事の内容把握のために、記事に表れる言説の一部抜き出しを行い、それらを4つのカテゴリー；A「街、周辺環境」B「住まい、暮らし」C「住宅形態」D「意識、考え方」に大別した。さらにテーマ別に話題を分類し、これらの分類項目ごとに記事変遷を見る（表1）。

表1 抽出記事の分類項目とその内容

分類項目	詳細	
A 街、周辺環境	都会	「都会」「東京」などの言葉の表現があり、その特徴や現況を述べている記事
	郊外	「郊外」「東京のはずれ」などの言葉の表現があり、その特徴や現況を述べている記事
	地方田舎	「地方都市」「田舎」「農村」などの言葉の表現があり、その特徴や現況を述べている記事。また具体的な県名が記されている場合。
	環境問題 自然や衛生	エネルギー問題や、地球温暖化等の地球環境保全に関する記事および、まちの中に存在する自然環境(山、川、街路樹等)
	人間関係	近隣住民や、借家の家主との関係性に関する記事
	交通	自転車、自動車、電車等の交通機関に関する記事
	公共施設・空間 街並み 眺望	道路や公園、オープンスペース、老人ホームなど公共のものに関する記事 街並みについてや環境、家からの眺め、居住環境としてまちに持っている印象が述べられている記事
B 住まい、暮らし	知識・事実	社会的背景や動向、傾向や過去との対比など建築に関する専門的な知識が述べられている記事
	増改築 リフォーム	増築、改築、リフォームの事例及び、新築の際に増築を視野に入れているなどの記述
	工夫・説明 間取り設備	住居に対してよりよい生活のために工夫をしている場合、その説明や具体的な間取り情報、押入れなどの設備に関する記事
	安全性	「耐震」「耐火」「不燃住宅」「頑丈な住まい」などの言葉で表現される、構造面に関する記事
	室内環境	通風、採光、日当たりなど、外からの影響に関する記事
	庭・外観	庭や住宅の外観に関する記事
	衛生面	住環境の衛生面や、それに伴う健康への意識が述べられている記事
ライフスタイル	日々の暮らしの住まい方過ごし方、家族とのかかわりや、人生設計に関する記事	
C 住宅形態	住宅スタイル	日本風、西洋風、和洋折衷など住宅のデザインに関わる記事
	借家	借家に関する記事
	持家 集合住宅	新築中古にかかわらず、持家に関する記事 協同住宅、アパート、団地、マンション、社宅などを集合住宅としてまとめる
D 意識、考え方	本位	住まいが特定の人物(客、家族、子供、高齢者等)のための場所として表現される記事
	海外比較	比較要素として海外について触れられている場合
	住意識	抽象的な住宅に対する人々の考え方、価値観、人間が本来持っている思想に関する記事
	問題点	街や住宅に対する不満や不便に感じている点など、現状を問題視している記事
	願望	具体的な改善を求めている内容や、不満がある上での願いが述べられている記事

全1011記事に対して各記事の要旨を抜粋したのち、上記に沿って内容分類を行った。10年ごとの年代別に対象記事数と、各分類項目の内訳記事数を示したものが表2である。(1記事内に複数項目ある場合は重複してカウント)

表2 対象記事数と内容分類結果

年	対象記事数(件)	分類																								
		A 街、周辺環境							B 住まい、暮らし							C 住宅形態			D 意識、考え方							
		都会	郊外	地方田舎	環境問題 自然 衛生	人間 関係	交通	公共施設・ 空間	街並み 眺望	知識・ 事実	増改築 リフォーム	工夫説明 間取り 設備	安全 性	室内 環境	庭・ 外観	衛生 面	ライフ スタイル	住宅 スタイル	借家	持家	集合 住宅	本位	海外 比較	住 意 識	問 題 点	願 望
1910-1919	116	13	5	6	7	16	1	2	6	30	3	72	2	19	17	18	34	25	23	9	2	13	10	36	38	30
1920-1929	173	13	21	10	3	10	5	3	13	29	4	109	12	19	29	20	39	41	21	40	7	18	8	52	22	30
1930-1939	49	1	4	1	3	12	1	1	1	3	1	25	1	7	8	4	20	4	2	4	15	6	1	18	6	9
1940-1949	54	2	2	8	3	17	1	1	1	9	0	12	3	0	3	6	30	0	0	4	7	0	2	25	11	5
1950-1959	98	12	4	13	10	11	1	7	6	23	11	48	3	9	14	13	28	1	2	10	19	5	4	33	30	16
1960-1969	110	10	2	6	23	9	3	14	13	27	11	51	1	5	10	8	27	0	0	13	15	13	5	45	21	35
1970-1979	124	12	3	11	24	17	5	12	14	34	18	75	8	18	17	5	31	5	0	17	21	10	5	61	45	37
1980-1989	90	11	5	12	30	16	6	10	20	20	5	37	0	8	2	3	46	2	1	17	21	1	9	38	65	29
1990-1999	100	14	3	13	27	19	7	6	28	28	5	50	2	18	11	2	34	0	1	5	11	5	5	41	22	31
2000-2009	97	4	1	13	31	26	6	2	24	15	15	40	3	14	8	0	31	1	2	2	8	3	5	46	16	27
計	1011	92	50	93	161	153	36	58	126	218	73	519	35	117	119	79	320	79	52	121	126	74	54	395	276	249

3. 分析

(1) カテゴリーA「街，周辺環境」の記事分析

「街，周辺環境」に関する記事の存在とその内容の年代変化を模式的に示したものが図1である。

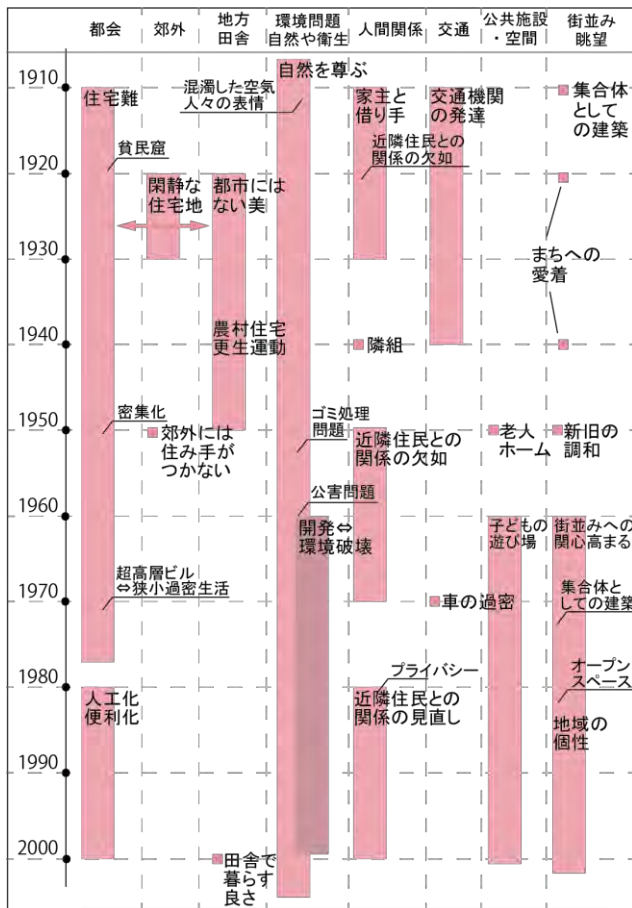


図1 「街，周辺環境」記事内容の年代変化

A-1) 都会

住宅難という言葉が目立ち、貧民窟も社会問題として捉えられ、住まいに関する問題が多かったことが分かる。

戦後の住宅供給により住宅難は緩和されたように思われたが、年々住宅の密集化が進み、「建てても建てても追いつかない」（1959.2）状況が続いた。建物は上へと高くせざるを得なくなり、超高層ビルが目立った。

都市が発展し便利になっていく一方で、庶民の生活はいまだに狭小過密な暮らしが続いていた。次第に技術の向上により様々なことが人工化・便利化された。

A-2) 郊外

1920年代、閑静な住宅地として、郊外住宅が注目を浴びた。広くはなくても、周囲に畑があり、家に居ながら自然豊かな眺望を楽しめることが魅力であった。1950年代には都市に人口が集中し、郊外住宅は環境が良くても住み手がつかなくなった。

A-3) 地方田舎

田舎には都市にはない美があるとその環境を誇りに思いながらも、簡易生活や文化生活が成り立たず都会を羨

む傾向にあった。また都会に住む人も同様に、田舎での自然と共にある生活を羨ましく思っており、1925年頃には都会と田舎を平均した生活が理想ではないかと考えられた。つまり、人々は日々の生活に対して「便利」と「自然」の双方を求めていたと言える。

A-4) 環境問題・自然や衛生

自然を尊び、自然と共にある生活を良しとする風潮は日本人の根本にあり、空気の良さや緑のある環境に安らぎを感じた。しかし戦後、生活の便利化や技術発展と共に、環境破壊や公害、ゴミの処理方法が問題となった。

A-5) 人間関係

多くの人々が借家住まいであった1910～1930年代にかけて、家主と借り手の人間関係が問題となる。当時住宅の需要が高かったため、土地を持つ人々は多少杜撰な建て方でも借り手は見つかると考えていた。実際に借家は住人にとって不親切な住まいであったため居住者の不満は尽きず、居住者側の使い方も雑であった。転居が多かったことから近隣住民とのつながりも乏しくなった。

戦時下においては、隣組制のもと、共同住宅、協力食事などが目立った。1950年から住宅の大量供給が進む中で再び近隣住民との関係は希薄化したが、1980年頃から子供の成長のためや老人への配慮から、人間関係の大切さが見直される傾向にある。

A-6) 交通

交通機関の発達により、人々の生活は豊かになる。

1970年代、居住地選択の際に通勤や都心へのアクセスの良さなどを重視する傾向にあり、交通機関の整備は住宅のあり方や生活を大きく変えた。車の過密化が進むと、自然環境や公共空間への様々な悪影響が話題となる。

A-7) 公共施設・空間

1950年代、老人の生活に焦点を当てた記事が見られるようになる。1960年代以降、住宅の高層化や交通の発達から、安全な子どもの遊び場が奪われた。かつてのように庭をもつことが叶わなくなったため、主婦たちは子どもの安全な遊び場としての広場等の空間や自然を感じられる場所を公共の場に強く求めるようになった。

A-8) 街並み・眺望

我が国では、住宅に関することは個人の問題であると捉える傾向にあり、都市の一部であるという考えがなかったことが街並みに影響した。戦前は自分の住む町に愛着を持つ人の姿がみられたが、戦後は新旧の調和に関心が集まった。住まいが激変していく中で、個々の建て方よりも集合体としての建築を重視すべきという姿勢になる。更に1980年以降になると地域の個性が見直された。

(2) カテゴリーB「住まい，暮らし」の記事分析

「住まい，暮らし」に関する記事の存在とその内容の

年代変化を模式的に示したものが図2である。

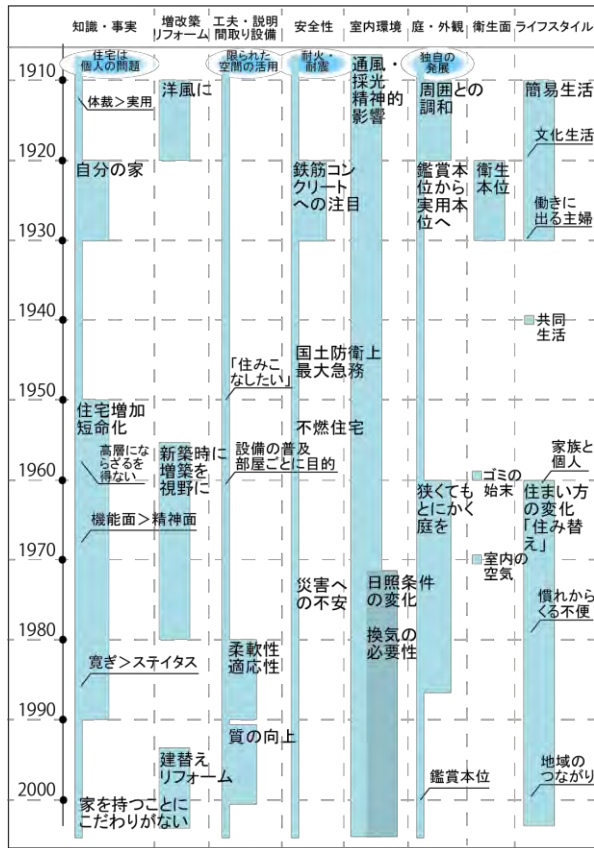


図2 「住まい、暮らし」記事内容の年代変化

B-1) 知識・事実

大正期より、我が国の住宅は南の最も良い場所に客を迎える接客本位であり、実用性よりも体裁を重視した住まいである、という言説が多い。家族本位思考に変わり、自分の家を建てて住みたいと望むようになるが、多くは変わらず借家住まいが続き、持ち家は夢のままだった。

戦後、以前より住宅を手に入れることは容易になるが、大量供給された住まいは安らぎや癒しなどの精神面よりも、日常生活における機能面ばかりに焦点が当てられた。住み替えの風潮が高まり住宅の寿命は短くなった。

1980年代には、住宅の体裁よりも精神的に落ち着く「くつろぎの空間」を住まいに求めるようになり、住み続けたいと願う人々が増えた。

B-2) 増改築・リフォーム

1910, 1920年代は家族構成の変化からやむを得ず増改築をする様子と、洋風への改造が目立つ。1960年代頃からは、将来増築することを視野に入れて新築する傾向が強くなり、家族構成の変化、子供の成長、また道路拡幅に伴って増改築せざるを得ない事例もあった。1990年代後半からは、建て替えやリフォームがブームとなる。

B-3) 工夫・説明・間取り・設備

人々は一貫して限られた空間をいかに工夫するかを求め続けてきた。1920年代は簡易生活の実現のために、間

取りに西洋風を取り入れるようになる。簡易生活とは、家の中での仕事をするのに便利であること、安全に外出ができ、子供の成長や教育を妨げない住まいであることを指す。1950年代は狭い家をどう「住みこなす」かが重要視され、住宅内部は、家族とふれあう公的な空間と個人の私的な空間に分けられ、部屋ごとの目的や接続に着目された。

住宅の大量供給が落ち着き、質が問われるようになると「一年中快適に住むため」の住宅設備が向上した。古くから日本の家屋は開放的で夏を涼しく住むための知識や工夫は豊富であったが、冬を暖かく住むための設備は乏しかった。暖房の必要性は遡ると1920年代にも述べられているが、ここで実現した。

1980年代になると住宅の個性を求めるようになる。家族構成や生活、個性好みにあわせて自由に居住空間を変えられ、その家らしい住まいにしたいという風潮がうまれた。住宅の適応性・柔軟性に関心が寄せられたと共に、地域らしさや、老人にとっても暮らしやすい空間が望まれた。明るく快適な「自然」と「家族」を感じられる住まいに人々は惹かれ工夫を凝らしてきた。

B-4) 安全性

生命、財産を守る住まいとして、耐火性耐震性は常に求められてきた。1920年代には鉄筋コンクリート住宅への関心が強く、戦中には国土防衛のためにその需要が高まる。戦後には不燃住宅に注目が集まった。

1970年後半になると住宅密集化によって災害への不安が大きくなった。

B-5) 室内環境

通風と採光、つまり住宅内部が明るく新鮮な空気で包まれていることが生活環境として好ましいと考えられているのは、大正時代から現代にいたるまで変わらない価値観である。しかし1970年代、都市の住宅密集化によって隣家がすぐ近くに建設されたり、高層建築が目立つようになったりしたことから日照条件や景色が変化した。さらに高気密住宅が流行し、室内の空気の汚れやカビなど健康面が問題となり、換気の必要性が述べられた。

B-6) 庭・外観

我が国の住宅は海外の影響を受けて変化してきたが、庭に関しては独自の発展を遂げてきた。1910年代から、庭は周囲の環境との調和が重んじられ、自然を感じられる大切な場所だった。1920年代になると鑑賞本位であった庭が実用本位へと変化していく。

次第に庭を持つ住宅が減少し、1960年代には狭くてもいいから自由に使え、手入れのできる庭を切望するようになる。わずかな隙間でも庭として確保した。2000年代に入ると鑑賞本位の考えが再び広まり始める。

B-7) 衛生面

日本の住宅は不衛生・不便・不経済と表現され、不満が多く、中でも便所に対する要求が多い。1910、1920年代は衛生面を重視する傾向にあった。1960年代にはゴミ始末の問題や室内の空気の汚れが問題視された。

B-8) ライフスタイル

1910年代中頃から簡易生活を精巧な生活であると考えた風潮があり、1920年代中頃にその傾向は強まる。文化生活、文化住宅といった言葉もよく使われるようになり、魂と肉体を休めることのできる楽しき住まいが求められた。簡易生活の成立によって、主婦が働きに出ることが可能になった。

1940年には共同生活が営まれた。食事、風呂などにおいて共同、協力して暮らしていた様子が見て取れた。

1960年代以降は「家族と団欒を楽しむ場所」と「一人で休むことのできるプライベートな場所」の双方を分けて求める傾向にある。さらに、住まい方が大きく変化する時代となり、家族構成の変化等に合わせて住居を住み替えることが一般化した。同じ地に長く住むことが少なくなったことに加え、核家族化・孤立化が進んだことで、集合住宅一戸建問わず近隣住民との関わりが希薄化した。

(3) カテゴリーC「住宅形態」の記事分析

「住宅形態」に関する記事の存在とその内容の年代変化を模式的に示したものが図3である。

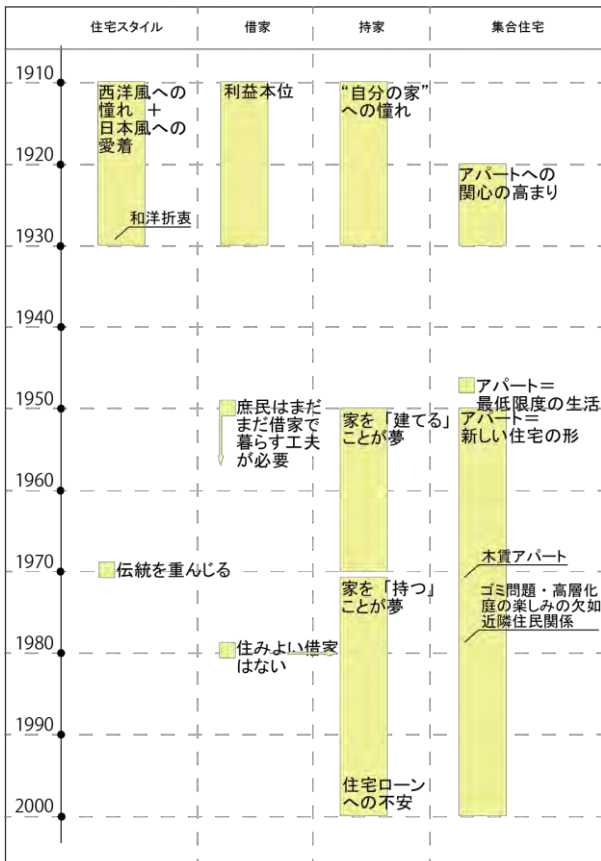


図3 「住宅形態」記事内容の年代変化

C-1) 住宅スタイル

大正期には洋風住宅に憧れを抱きながらも、日本風から離れられず住宅のスタイルについて悩み模索している様子が読み取れる。

日本風の住宅には立ったり座ったりなど日常生活における動作に無駄が多く、洋風が良いと考える風潮がうまれた。1920年代に入るとその勢いはさらに強まり簡易生活を営むためには住宅の洋風化が必須であると考えられ、1922年には「生活の様式は勿論洋風」(1922.11)などと述べられるほどである。清潔で便利かつ能率的な生活を可能にする洋風住宅はその機能面において注目されたが、一方で批判的な意見も多くあった。洋風住宅は殺風景で、「お役所にでも住んでいるような心持」(1911.8)がすると表現された。また、日本風の住宅は洋風にはない趣があり、くつろぎや落ち着きがあるという精神的な面で評価を得ていた。

両者について様々な意見が飛び交う中で、和洋折衷という住宅形態がうまれた。現存住宅では内部のみが洋風化され、新築住宅では外観を洋風に、内装は日本風にする傾向になり、いずれも和洋の調和が問題となった。

1970年人々は日本の古くからの住まいに良さを再認識するようになり、和室や障子などを魅力に感じてそれらを取り入れるなど、伝統を重んじる考え方がみられた。

C-2) 借家

1910～1930年代、庶民の大多数が借家住まいであった。借家の利益本位で粗雑な建て方に対する借り手の不満と、心ない住まい方に対する家主の不満が混在した。人々は職業・経済面から借家に住むほかなく、決して住みよいとは言えない借家で転居を繰り返しながら暮らしていた。

戦後自分の家を手に入れられたのはごく一部の階級であり、庶民はいまだに借家でいかに工夫して住むかということに苦勞していた。1980年代になっても住みよい借家はなく、やむを得ず持家へと移る傾向も見られた。

C-3) 持家

1910～1930年代、利益本位の借家に毎月お金を払うよりは、借金をしてでも家を建てた方がよいという風潮が生じた。「自分の家」への憧れが強く、1920年代は持ち家に関する記事が急増した。しかし制度や技術の未熟さから、思い描く「自分の家」を実際に手に入れられた人は少なかった。

戦後は自分の家を「建てる」ことを望む人が増えたが、1970年代には自分の家を「持つ」ことに焦点が当てられるようになった。住宅ローンへの不安も多い。

C-4) 集合住宅

1920年代、アパートメントは文化的で簡易生活を営める理想的な住宅として認知され、関心が高まる。便利で快適、経済的であると良い点ばかりが挙げられていたが、徐々に否定的な意見も見られるようになる。

1940年代後半にはアパート生活は最低限度の生活だと言われたが、戦後には「新しい住宅の形」として再注目された。「あと一間あれば…」と、その狭さについてよく表現されたが、多くの人々はいつか自分の家を持つために我慢して住んでいた。また、ゴミ始末の問題や、庭の楽しみがないこと、近隣住民への気遣いが絶えないことが問題視された。住宅の「狭さ」が最も不便と言われている中で、1970年代には圧倒的に設備や間取りが不十分な木賃アパートが建設されるようになる。

都市の密集化に伴い高層住宅が次々に建設されるようになると、同時に周辺環境にも関心をもつようになった。

(4) カテゴリーC「意識、考え方」の記事分析

「意識、考え方」に関する記事の存在とその内容の年代変化を模式的に示したものが図4である。

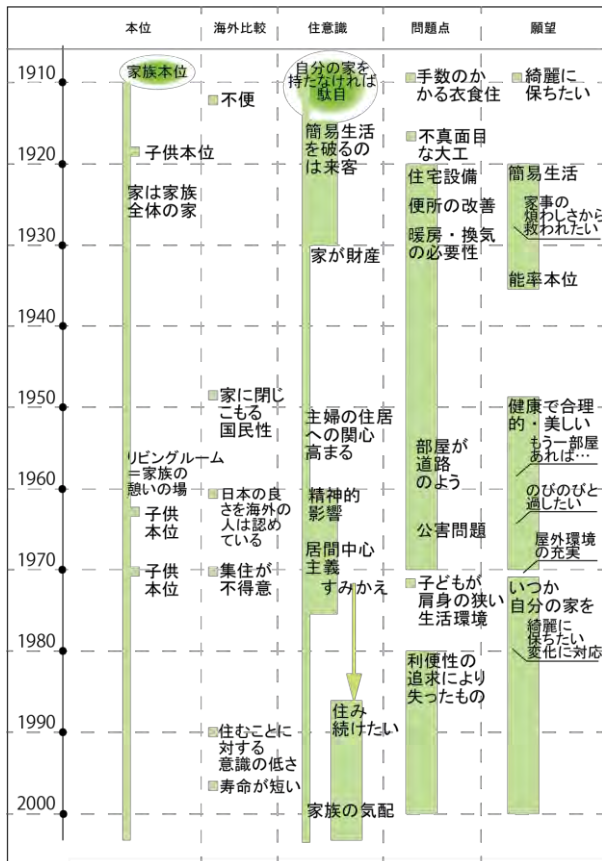


図4 「意識、考え方」記事内容の年代変化

D-1) 本位

大正時代、かつての接客本位から家族本位へ変えていくべきだという思想が強まった。特に子供に対する配慮が多いが、これは婦人雑誌であるが故とも考えられる。

戦後には、リビングルームが家族の憩いの場として存在した。1960年代には、子供部屋の確保や子供の成長のために明るい住宅を望んだ。1970年代になると、住宅内部ではなく屋外における子供の遊び場としての安全な空間を求めるといふ、異なる子供本位志向がみられた。

D-2) 海外比較

日本の住宅は「不便」であり、海外の生活が理想的と考えられた。海外からは、人が熱心に細工して作られた日本の家は魅力であると評されたが、洋風化が進行した。

戦後、1950年代に住環境が大きく変わっても、海外の人々は日本の良さを日本人よりも理解していたようで、日本人は日本の住まいが不便で街並みも調和がないと否定的に捉えてきたが、1960年には、昔の日本の住まいからヒントを得ていたことが述べられている。1970年代、高層住宅が増加すると、「集まって住む」ことに関して西欧に比べて不得意であること、そもそも日本人は住むことに対する意識が低いことも海外と比較された。

D-3) 住意識

古くから、自分の家を持つことが良いことだと認識されていた。簡易生活を理想とする気風の中で、それを破るのは来客であるとされた。1930年頃には家は財産であるという考えが存在し、家そのものの価値が高かったこと、家が人の評価や印象に影響したことが読み取れる。

1950年代後半から、住居が人に与える精神的影響が大きいために、働くための便利さよりも健康的で落ち着いた空間が好まれた。家族の時間を大切にできるようになり居間中心主義が広まった。住宅が「狭い」ことが大衆の頭を最も悩ませたが、その現状に対して日々の生活の工夫が考えられた。

1975年「「移ること」が前提の「住む」」(1975.3)と述べられたように、人々の中で家族の成長やライフスタイルの変化に伴って住み替えることが共通の意識としてあった。永住したいと思えるほどの快適な住まいや街の整備が進んでいなかったからだと考えられる。

しかし、1980年代後半には一転して住み続けたいという傾向が強まり、住み慣れた地に落ち着きを感じたり、街の環境に愛着を持ったりする記事が増える。不便ながらも工夫して暮らしてきた住まいに思い入れや人間関係が築かれたと考えられる。住宅内部の質に関心が集まり、より一層「家族のため」の家であることが大切にされた。

D-4) 問題点

立ったり座ったりの動作や習慣に無駄が多く、手数のかかる日本の衣食住に特に婦人が不満を抱いていた。借家・持ち家共に、日常の不便は共通の問題であった。便所は「なくてはならないがいらぬもの」と言われ、改善が強く求められた。洋風化による椅子式は、従来の坐式に合わせた暖房設備から新たな設備への要求を高めた。

戦後は住宅量は増加したが便利さばかりが優先され、住む人の不満はなくなり、部屋が「道路のような感じ」(1953.8)「建物であっても家ではありません」(1963.12)などと言われた。1960年代後半には公害問題や環境破壊、資源への関心が高まる。1970年代、高層住

宅の建設が進むと、子どもの環境づくりが見直され、公共の空間に安全な遊び場がないことが問題となった。

1980年代後半、様々な制度が整った反面、家を建てるというよりつくらされているかのようだと言和感を口にした。機能面、利便性の追求によって地域の個性が乏しくなったり、日本の特色が失われたりしてきたことが良くないという意見の記事が増加した。

D-5) 願望

1920～1930年代中頃まで簡易生活の実現が主婦たちの第一の願望であり、不便な住居において家事の煩わしさから救われたいという切実な願望であったと推測できる。

来客がいつあってもよいように整頓しておきたいという思いは、1910年代では接客本位の名残と考えられるが、1970年代には、住まいを綺麗に保っていることで他人からの評価を得られ、誇りに感じていたと思われる。

戦後、個人のプライベートな空間を求め始め、のびのびと合理的で健康な住まい、家族や四季の変化に対応できる住まいを理想とした。屋外については老人や子供など各年齢層に必要な施設や広場の必要性が訴えられた。

4. 考察

前章で行った、A「街、周辺環境」B「住まい、暮らし」C「住宅形態」D「意識、考え方」の各分類項目の分析結果を基に、住宅関係の施策や時代背景を加味して全体像として図5に整理した。前章では各分類項目内の変化を見てきたが、ここではまず、項目同士の関係や社会背景を加えて、時代変化を捉える。次に、住まいや住み方をめぐる価値観について考察する。

(1) 年代傾向

住宅に着目した時代区分はさまざまな観点で行われてきた。鈴木は、第二次世界大戦後の住居の時代区分¹⁶⁾として1945年までを「戦前期」、1945年から1955年を「戦後復興期」、1955年から1973年を「高度成長期」、1973年から1990年を「低成長期」として整理した。

既往の知見と前章の分析結果をふまえ、本研究においては1910年から2009年の100年間を、下記の6区分に分け、各時期区分の特徴や傾向を、特に「当時の認識・考え」、「理想」や「求めるもの」、「嗜好」に着目して描写する。

a) 第I期：住宅改良期（1910～1935）

社会全体の発展の中で住まいの分野が遅れていることが指摘、問題視された。1919年に都市計画法（旧法）や市街地建築物法、道路法などが制定され、住宅を個々としてではなく、集合体として捉えようという意識が専門

家の間で言われたが、当時一般の人々は住宅内部の改良に関心があり、街への考え方は広まらなかったと考えられる。

借家住まいの貸し手借り手の人間関係において互いに不満を持っている記事が多く見られた。職業の変化から家に安らぎを求めるようになり、また、来客が減ったことで家族本位の思想が芽生える。そんな中でさまざまな理想や願望が生まれ、人々は現在の住居に対する不満やそれを解消するための工夫を凝らした。これまでの客本位志向から家族本位志向へと変化し、「文化生活」「簡易生活」「洋風化」が叫ばれるようになった。特に、健康のために最も清潔にするべきとされた「台所」と肉体を休め明日への活力とするための「寝室」の改善が目立つ。日常生活が不便であると日本家屋に不満を持った主婦たちは西洋風の住宅における仕事のしやすさという「機能面」に惹かれたのである。洋風化に伴い、日本家屋の良さも再認識されたが、自然の安らぎを感じる庭さえも実用本位へと変化した。

大衆は借家住まいを余儀なくされており、「自分の家」「わが家」というものに様々な夢や理想を持っていた。1921年に住宅難対策のために住宅組合法が制定され、都市の中間層の持ち家を推進したことが、持ち家への憧れをさらに強めた。いつか自分の家を建てるためにと我慢の生活を送りながら、誰もが「理想の住宅」を思い描き、それを一つの娯楽として楽しんだ。

1923年に関東大震災が発生すると、耐火耐震の安全性への関心が一層高まり、翌年の1924年には同潤会のアパートが建設された。これを機に集合住宅、アパートは人々にとって理想の住まいとして認識された。

b) 第II期：戦時下住宅計画学形成期（1930～1945）

1941年に同潤会が解散し、住宅営団が発足した。営団は戦中および戦後復興の住宅事情の厳しい時代に重要な組織であった。戦時下で共同生活、共同住宅、協力生活といった生活スタイルが主流となり、隣組制度が生まれた。「住居」「まち」よりも、その中で営まれる「暮らし」「食事」に重点が置かれていることが分かる。

c) 第III期：法制度確立と住宅供給期（1945～1960）

終戦を迎え、住宅の「量」が求められた。建築費の高騰により借家の建設が困難になったため、戦前の住まい方は成立しなくなった。1950年住宅金融公庫法、1951年公営住宅法、1955年には日本住宅公団が設立し、賃貸の集合住宅が大量に建設される。記事で多く見られた、いずれ持ち家へと転出することを初めから想定する「住み替え」意識は、政府によって築かれたと言える。

戦災の影響から田舎の古い家に住む家庭の増加により、増改築が目立つ。住まいの外にも目を向けられるようになり、窓からの眺めや街としての景色、自然への関心が

高まる。子どもの教育に住環境が与える影響は大きいと考えられ、子どもが安心して遊べる場所を求める改善や不満の声が多い。さらに老人の住まい方の一つとして、老人ホームに関する記事があらわれる。家族のあり方を考えるようになったと見受けられた。

戦時中と同様に人々は多くを求めずに、簡素な生活、能率的、簡易住宅を理想とする中で、自然や庭の緑に美しさを感じ楽しみたいという嗜好も見え始めた。

d) 第四期：住生活危機と経済発展期 (1955～1970)

人口の急増に伴い、住宅難は深刻化した。1962年区分所有法に制定により集合住宅の分譲が一般化する。さらに終身雇用制、年功序列制の確立によって住み替えること、庭付き一戸建てをゴールとする住宅双六の意識はさらに普及した。転居を前提に住み始めるため、当然住宅の寿命は短くなった。

そのような中、人々は能率的で簡素な生活を求める一方で、住宅に「好み」も活かしたいと思うようになる。また、家族団欒の場を住居に求める家族本位志向が強まるが、同時にプライバシーを守る個々の空間も大切にしたいという意識が芽生えた。

e) 第五期：環境の本質再検討期 (1970～1990)

生活の機能面の向上を求め改善されてきた住環境・住宅の増加の中で、生活は豊かになってきたと見えた。しかし、自然環境が破壊されてきたことや、あまりに人工化・便利化された住居や街並みが蔓延したことに人々は違和感を覚え始める。住宅の絶対数が増加し、「量」から「質」を求める時代へと推移する。

住宅の異常な密集により、日照条件に伴う室内環境の問題や、公共の子ども遊び場の減少の問題が生じた。鉄筋アパートや高気密住宅に住む人が増えたことで、かつての開放的な日本家屋では配慮の必要のなかった室内環境が注目されるようになる。画一的で閉鎖的な壁ばかりの住居に住むようになったことは、人間関係の希薄化にも影響した。

日本列島改造論による地価高騰の影響で、居住することによる使用価値よりも資産価値を重視して住宅を購入する人や、将来増改築することを視野に入れて新築する家も増えた。ライフスタイル、人生設計を重視する傾向があると思われる。家具や内装に関する記事の増加が見られ、特に冬をあたたく住むための工夫として暖房の知識紹介記事が多い。

f) 第六期：住意識転換期 (1990～2009)

日本の雇用形態が大きく崩れ、平成不況といわれた。これまでの核家族を中心とした家族のあり方から多様な家族形態への住生活のあり方が模索され、ゆとりのある住まいが求められる。住宅内部の設備やバリアフリー化を始め、人々はどこに住むかということに重要視してお

り、住み慣れた地で長く最後まで過ごしたいという願望が強い。

家の中にいながらも自然を感じたいという気持ちが読み取れる記事が多く見られた。中でも住宅内部の材料として「自然素材」という言葉が目立ち、さらに家から見える景色・眺望への要求も高まる。自然を大切に思う心、それに落ち着きを感じる心というのは人間本来が持っている価値観であるが、便利さや能率的な生活を求めるあまりに忘れかけていたと考えられる。

住居を“落ち着く”“家族のための”“心を休める”などと捉えるようになり、家事をしながらも家族の気配を感じたいという希望が多々見られた。狭い家だと言われていたにもかかわらず、機能的や動線ばかりを気にして“人のつながり”を考えられていなかったことへの反動と言える。

住宅の密集により、庭をもつことが難しくなってきたことから、公共の空間に緑や安らぎの場所を求めるようになる。また、生活の基盤となる交通の便を重視するなど街の周辺環境や施設への関心が高まった。都市化、高度成長期の背景として環境問題が注目され、省エネルギー住宅やゴミ始末に関する記事が増える。

(2) 外部要因との関係

a) 内在する価値観と促進要因

人々に根本的に内在する価値観として、「緑に魅力や安らぎを感じる」「住まいの安全性を求める」「人間関係を大切にしたい」の3点が通時的に読み取れた。これらは、それらの管理状態や関係性が危うくなると保全や再構築が叫ばれ大切さを再認識するように、時代によって関心度や重要度には波がある。(図6)



図6 内在する価値観と外部要因の影響関係

昔から自然を大切に思う価値観は家の中や庭、街並みにも共通で見られ、それらに安らぎを感じることで、精神的な影響が大きいことが頻繁に述べられた。交通の発達や、便利さを求めるあまりに開発が進んだことで、公害や環境破壊が問題となると、環境保全への関心が高まる。

生命と財産を守るための住居として住まいの安全性、安心感も常に求められきた。自然災害の多い我国では、それらが発生したときに関心が高まり、技術の発展にも

つながった。

人間関係を重要と考えるのもまた、変わらない価値観である。戦前、借家の家主と借り手の関係が問題になるが、1930年後半から1945年にかけて隣組制度が生まれ、人々は互いに協力し合い助け合いながら暮らしていた。1950年代には様々な住宅制度の確立や人口集中により、住宅の密集化及び高層化が進み、近隣住民との関係は希薄化した。核家族化や住み替えが一般化したことも影響した。さらに、鉄筋コンクリート住宅や集合住宅など「壁」で囲われた閉鎖的な住まいにより、人々の関係も防御的な傾向を示すようになる。

b) 社会的風潮

一方で、社会背景によって出現した価値観もあり、それによって目指される街並みや住環境がある。

1920年代、借家住まいを余儀なくされていた人々にとって、政府が持ち家を推進したことが持ち家を良いと捉える価値観につながり、「理想」として長く認識されることになる。いつか自分の家を「建てたい」と考えるようになるが、戦後住宅の大量建設が行なわれ1970年頃には家を「持ちたい」という願望に変わった。

長く理想としてあり続けた持ち家志向だったが、戦後大きく住宅事情が変わった我が国では、「量」が満たされれば「質」が問題になり、設備や技術により改善されれば「環境」が問題となった。

5. 結論

(1) 研究成果

第一に、一般雑誌『婦人之友』誌における近現代の住環境関連記事を長期的に整理したことで、住まいの形が社会背景等さまざまな外部要因の影響を受けて発展してきたこと、それに伴い住まい方や人々の暮らしに変化があったこと、また一般の人々が各時代に持っていた理想や価値観の変遷を明らかにした。さらに6期に時期区分を行うことでこれらの変遷の在り様を把握した。

第二に、人々には「自然環境」「人間関係」「安全性」といった内面的な価値観と、社会背景によって出現した価値観があることを明らかにした。

(2) 今後の課題

本研究においては、一般大衆に向けて発行された雑誌の言説を対象に調査を行ったが、長期的に発行され続けている一般雑誌、専門誌、情報誌等は多数存在する。それらを用いて同様に記事の言説に着目して、比較することが必要である。

また大都市と地方など、地域による違いを踏まえて調

査を行う必要がある。

本研究では大正期から現代までの長期的にわたる観察ができたものの、既に大正期には近世的な価値観からはだいぶ変化していると考えられ、明治期の人々の価値観が分かる資料にもあたる必要がある。

参考文献

- 1) 西山卯三：『日本のすまい I (増補版)・II・III』、勁草書房、1987・1976・1980
- 2) 大岡敏昭：『江戸時代の家 暮らしの息吹を伝える』、pp.3, 水曜社、2017
- 3) 鈴木成文：『住まいを読む—現代日本住居論』、pp.175, 建築資料研究社、1999
- 4) 真鍋怜子, 中川武, 小岩正樹：近世末・近代の都市居住性に関する研究 東京都墨田区民家の地域的特質と変遷を通して、住総研研究論文集, No.39, 2012
- 5) 矢込祐太, 菅野博貢：公団賃貸住宅団地の空間構成の変遷と外部空間の構造についての考察, 日本建築学会計画系論文集, 第661号, pp.521-530, 2011.3
- 6) 岡本理恵, 澤谷真紀子, 住田昌二：雑誌『新住宅』掲載の戸建住宅の傾向分析 (建築計画), 日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系(35), pp.325-328, 1995.6
- 7) 反町周子, 内田青蔵：戦前期の都市中流住宅の台所と浴室の配置にみる水廻り空間の集約化に関する一考察—住宅専門誌『住宅』(大正5年から昭和18年)誌上の「あめりか屋」の作品を通して—, 日本家政学会誌, Vol.48 No.2, pp.187-192, 19975
- 8) 本間博文, 砺波恵子：住宅誌による三世同居家族の平面型の変遷に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第477号, pp.53-61, 1995.116
- 9) 久保加津代：大正デモクラシー期の「婦人之友」誌にみる住生活改善 「婦人之友」誌の特徴と住生活関連記事の経年的動向, 日本家政学会誌, Vol.43 No.12, pp.1223-1228, 1992
- 10) 久保加津代：大正デモクラシー期の「婦人之友」誌にみる住生活改善 家族本位とオリエンテーション, 日本家政学会誌, Vol.44 No.4, pp.275-281, 1993
- 11) 久保加津代：大正デモクラシー期の「婦人之友」誌にみる住生活改善 家族の日常生活空間と接客空間の分離について, 日本建築学会計画系論文集, 第461号, pp.175-181, 1994.7
- 12) 久保加津代：大正デモクラシー期の「婦人之友」誌にみる住生活改善 各室の起居様式と住宅の様式, 日本建築学会計画系論文集, 第471号, pp.155-163, 1995.5
- 13) 吉江 俊, 後藤 春彦, 山村 崇：首都圏における住環境の価値表現としての住宅広告の「語り」の時空間的動態, 日本建築学会計画系論文集, 第716号, pp.2231-2241, 2015.10
- 14) 山本 理奈, 内田 隆三：都市居住のイメージと住宅広告の役割に関する比較社会学的研究, 住総研研究論文集, No.40, 2017
- 15) 袁 偉, 栗原知子, 桜井康宏：新聞紙上広告等に見る新築建売住宅の平面動向—福井・岩手・大分における四半世紀の変化—, 日本建築学会技術報告集, 第39号, pp.651-656, 2012.6
- 16) 鈴木成文：『住まいを読む—現代日本住居論』、建築資料研究社、1999